筑前あさくらJA米

1.種子更新率100%　2.食味向上（タンパク質含有率6.8%以下）　3.仕上げ水分14.5~15.0%　4.作付比率の厳守

令和7年産　稲作ごよみ（中山間地版）

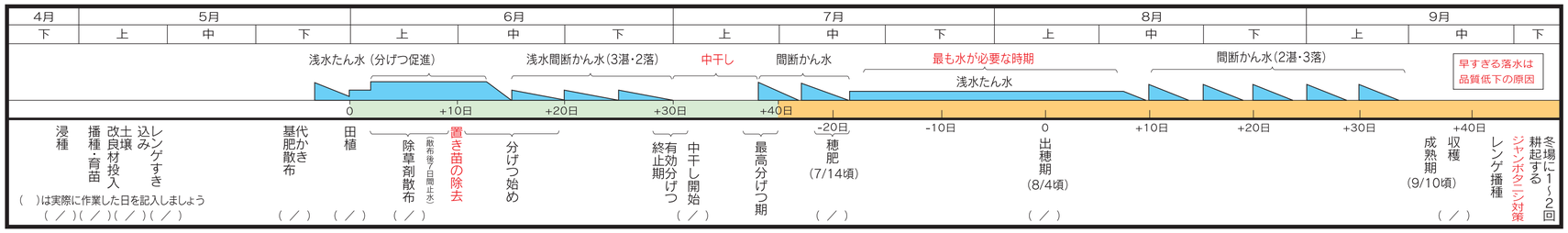
米は全量JAへ!!ーJA米基準ー

- ○ 銘柄が確認できた種子
- ○ 登録検査機関で受検した米
- ○ 栽培履歴記帳が確認された米
- ○ 残留農薬分析を実施した地域の米
- ○ 環境負荷低減の取り組みとして、中干し・秋耕の実施

筑前あさくら農業協同組合
朝倉地域担い手・産地育成協議会

〈農薬適正使用スローガン〉
①散布前に、必ず農薬ラベルを確認!
②散布時に、近隣作物や住宅街への飛散防止を徹底!
③水田では、農薬散布後の止水期間（7日間）を遵守!
④散布後に、必ず散布器具（タンク、ホース等）を洗浄!
⑤防除履歴は、正確に記帳!

1.主な作業と水管理 〈夢つくしの水管理例（6月1日田植）〉※ヒノヒカリでは中干しの開始時期が遅くなる。



2.育苗基準

育苗日数は28日を基本とする（箱育苗）

播種日よりの日数		主な作業
−7〜−1	育苗準備期間	
0	播種	
1〜11	出芽・緑化期	
12〜27	硬化期	
28	田植	

◎育苗箱
・10a当たり23箱を準備する。

◎土
・あさくら培土4.5袋または、山土10a当たり、100kg（5斗）準備する。
・山土には、70箱分の床土に育苗用肥料1kg（1袋）の割合で肥料を混和する。
・山土2に対して籾殻くん炭1の割合で混和する。

◎種子
・栽培履歴での適正な証明・品種固有の特性維持・病害虫予防のため毎年全量種子更新を行う。
・種子は10a当たり3.5kg準備する。
・育苗期の病害予防のため、必ず薬剤か温湯による消毒を行う。

【種子消毒】薬液に24時間浸漬する

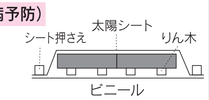
種籾5kgに対し	水10ℓ	テクリードCフロアブル 50mℓ（200倍） ＋ スミチオン乳剤 10mℓ（1000倍） ＋ ベンレート水和剤 20g（500倍）
注意	・消毒後は、半日程度風乾し、浸種する。 ・消毒廃液は、適正な処理を行う。	

温湯消毒の手法については、JA営農センターか普及指導センターへ尋ねる。

◎浸種・催芽
・芽立ちを均一に揃えるため浸種日数は充分にとる。
・種子は播種前日の夕方に水から上げる。（芽出しは1mm程度）

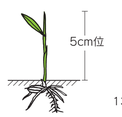
【は種に適した催芽状態】

◎播種
・播種前に床土に充分かん水する。（20箱分：水10ℓにナエファインフロアブル10mℓ）
・ナエファインフロアブル1000倍液を1箱500mℓかん注する。（苗立枯病予防）
・播種量は催芽籾で1箱当たり170g（1.5合）を基準とする。
・あさくら培土で種子が隠れる程度に充分覆土する。



◎出芽・緑化
・太陽シートによる平床出芽を基準とする。気温が低い地域は出芽器を利用する。
・日当たりの良い均平な場所にビニールを敷き、りん木を置いて育苗箱を並べる。
・気温が低い時期はハウス内に並べるが、温度の上がりすぎに注意する。
・太陽シートは、2~3年でアルミがはがれてくるのでとりかえる。

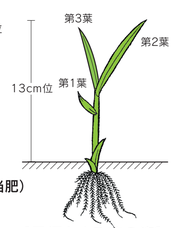
◎硬化
・苗の長さが5cm位になったら被覆資材を除去する。
・かん水は、覆土が乾いてから行う。
・根の張りを良くするため、夕方のかん水は極力避ける。



【被覆資材除去の目安】

◎弁当肥
・田植7~5日前に弁当肥を施す。
（水10ℓにポット肥料70gを溶かして20箱にかん注）
・日中高温・乾燥時には施さない。（葉焼防止）

（弁当肥）



【目標とする苗の姿】

◎箱施薬（本田病害虫予防）
・田植3日前~当日に露を払い箱施薬剤を1箱当たり50g散布する。
・散布後、薬剤が土の表面に落ちるようにかん水する。
・確実に1箱当たり50g施用しないと防除効果が劣る。

◎田植
・栽植密度は坪60~70株（目安 株間19~16cm、条間30cm）とし、1株植付本数は3~4本とする。
※ジャンボタニシ発生田では浅水管理を行い、スクミノン等を散布する。

※農薬の安全で適正な使用・栽培履歴の記帳を行いましょう。
農薬、肥料、資材の注文はJAへ!

3.土づくり対策

資材の分類	資材名	施用量（10a当たり）	備考
有機質	万能堆肥	2t	・腐植の増加、土壌通気性、保水性の向上 ・病害虫対策として稲収穫後すぐに耕起する ・収穫後に石灰窒素20kg/10aを施用（稲わらの分解促進）
	稲わら	全量	
けい酸質	けい酸加里	60kg	・カリの供給　・けい酸の供給　・登熟向上 ・倒伏防止 ・病害虫予防
	土改王	90kg	
	ミネラルG	140~200kg	・微量要素の供給

※裏作にレンゲを作付した場合は、田植3週間前までにすき込む。

4.施肥基準

【基肥一発肥料の施肥体系】（基肥施肥から代かきまでの期間が長くなると肥料の効果が低下する）

品種	肥料名	施肥量（10a当たり）	成分（%） N・P・K	成分量（10a当たりkg） N	P	K
夢つくし	軽量らくだ君488（早生用）	30kg	24・8・8	7.2	2.4	2.4
ヒノヒカリ	Jコート2000中稲	40~45kg	20・10・10	8.0~9.0	4.0~4.5	4.0~4.5

※基肥1回だけの施肥のため、原則として追肥・穂肥は施用しない。
※基肥一発肥料はカリ成分が少ないため、けい酸加里等のカリ資材を施用する。
※基肥一発肥料は天候等に左右されるため、年次により減収することがある。

【分施の施肥体系】（基肥施肥から代かきまでの期間が長くなると肥料の効果が低下する）

品種	肥料名	施肥量（10a当たり）		成分（%） N・P・K	成分量（10a当たりkg） N	P	K
夢つくし	ちくごのめぐみ444	基肥	30kg	14・14・14	4.2	4.2	4.2
	きばる穂肥エムコート	穂肥	15kg	20・0・16	3.0	0.0	2.4
ヒノヒカリ	ちくごのめぐみ444	基肥	35kg	14・14・14	4.9	4.9	4.9
	きばる穂肥エムコート	穂肥	15kg	20・0・16	3.0	0.0	2.4

※穂肥の量は生育状況・天候条件などにより加減する。
※食味向上（タンパク質含有率6.8%以下）のため、穂肥は1回とする。

5.除草剤使用基準

分類	除草剤名		使用量（10a当たり）	処理時期（田植後）	対象雑草名 ヒエ類	1年生広葉（コナギなど）	マツバイ	ホタルイ	ウリカワ	セリ	クログワイ
初中期一発処理剤	ジェイソウル	1キロ粒剤	1kg	3~10日	2.5葉期まで	○	○	○	○	○	
		ジャンボ	10パック	3~10日		○	○	○	○	○	
	アバンティ	1キロ粒剤	1kg	3~12日	3葉期まで	○	○	○	○	○	○
	アクシズMX	1キロ粒剤	1kg	7~15日	4葉期まで	○	○	○	○	○	○
中後期剤	ハイカット1キロ粒剤		1kg	15~25日 たん水処理	3.5葉期まで	○	○	○	○	○	○
	クリンチャーバスME液剤		1ℓ/水70ℓ	25~40日 落水処理	5葉期まで	○	○	○	○	○	○

※アバンティは、後作物に薬害を生じるおそれがあるので、後作物としてなす、たまねぎ及びさやえんどうを栽培しないこと。
○クログワイやウリカワが多いほ場は、収穫後に耕起する。

除草剤使用上の留意点
（1）除草剤散布後は1週間落水口を閉め、止水して湛水状態を保つ。
（2）水持ちの悪いほ場では、早め（雑草が発生する直前）の粒剤処理が効果的である。
（3）毎年同じ除草剤を使用し続けると特定の雑草が残るので、他の薬剤を使用する。

6.病害虫防除基準

箱施薬剤を使用することを前提とした構成となっているので、箱施薬剤を使用していない場合は、本田防除の効果が不十分となることがある。

※ピンク色は基本防除

月	旬	防除薬剤・使用量・対象病害虫 粉剤	液剤	ヘリ防除
田植3日前~当日		〈育苗箱施薬〉・ブーンゼクテラ箱粒剤　50g/箱（いもち病・ウンカ・コブノメイガ）		
6	上	**いもち病対策** ①いもち病の出やすい水口や風通しの悪い棚田の石垣つけ根部分を中心に田廻りをし、早期発見に努める。 ②補植用の苗は1週間程度では場外へ持ち出す。 ③窒素肥料・緑肥および穂肥を過用しない。 ④冷水のかん水をしない。 ⑤いもち病の発生が多い圃場では、田植え後30日頃を目安に予防的にコラトップジャンボP（10~13個/10a）を散布する。（特に6月下旬~7月上旬）		
6	中			
6	下			
7	上	・ビームトレボン粉剤5DL　4kg/10a（いもち病・ウンカ・カメムシ）（出穂・開花期は使用を避ける）	・ダブルカットバリダフロアブル　1000倍（いもち病・紋枯病） ・オーケストラスタークルエアー　1000倍（ウンカ・カメムシ）（出穂・開花期は使用を避ける）	・ダブルカットバリダフロアブル（いもち病・紋枯病） ・オーケストラスタークルエアー（ウンカ・カメムシ）（出穂・開花期は使用を避ける）
7	中	**紋枯病対策**　前年度多発した圃場では、モンガリット粒剤（3~4kg/10a）を散布する。 **白葉枯病対策** ①第1次伝染源のサヤヌカグサを掘り取り処分する。 ②被害わら、切り株は早めに耕起して埋没する。 ③窒素過多とならないようにする。 ④朝霧、雨等で葉がぬれているときは、発病田に入らない。 ⑤いもち病の予防と併せて出穂3~4週間前にオリゼメート粒剤（3kg/10a）を散布する。		
7	下			
8	上	〈出穂直前〉 ・ノンプラストレバリダ粉剤DL（いもち病・紋枯病・ウンカ・カメムシ）　4kg/10a	・ノンプラスバリダフロアブル　1000倍（いもち病・紋枯病） ・スタークル液剤10　1000倍（出穂・開花期は使用を避ける） 又は、キラップフロアブル　1000倍（カメムシ・ウンカ） ※ただし、イネカメムシには効果が劣る	・ノンプラスバリダフロアブル（いもち病・紋枯病） ・スタークル液剤10（出穂・開花期は使用を避ける） 又は、キラップフロアブル（カメムシ・ウンカ） ※ただし、イネカメムシには効果が劣る
8	中			
8	下	ウンカ・カメムシ対策（出穂・開花期は使用を避ける） ・スタークル粉剤DL　3kg/10a　・スタークル豆つぶ　250g/10a ・スタークル液剤10　1000倍　・エクシード粉剤DL　3kg/10a		
9	上	〈飛散防止対策〉 ・作物別・品種別の団地化 ・適正な散布圧力・ドリフト低減ノズルの使用 ・風の無い時に農薬散布 ・畦畔からほ場の内側に向かっての散布		
9	中			
9	下			

いもち病

サヤヌカグサ

ホソハリカメムシ

イネカメムシ

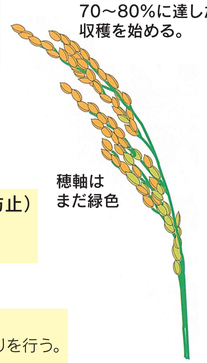
カメムシ被害粒

7.収穫・乾燥・調製

(1) 収穫の早限期と晩限期の目安表

品種＼項目	籾水分（%） 早限	晩限	黄褐色籾粒数割合（%） 早限	収穫適期幅 成熟期前後 前	後
夢つくし	28	24	70	3日	4日
ヒノヒカリ	28	22	70	4日	4日

〈収穫適期の穂〉



・青籾は待っていても実は入らない。
・穂軸が枯れてから刈り始めては刈り遅れとなる。

(2) 乾燥

・乾燥機の取扱説明書を再度確認する。　・2段乾燥を行う。（過乾燥防止）
・水分計を活用し玄米水分15%を目標に乾燥する。
・乾燥機停止後も玄米水分は下がり続けるので注意する。

(3) 調製

・玄米水分安定のため乾燥終了後5~7日間放置後、籾摺りをする。
・玄米水分が高いと肌ずれしやすいので、玄米水分を確認してから籾摺りを行う。
・ライスグレーダの網目は1.85mmを使用する。

水稲品種特性表（東峰村6月1日田植）

品種名	出穂期	成熟期	耐病性 いもち病	白葉枯病	耐倒伏性	栽培の留意点
夢つくし	8/4	9/10	弱	やや弱	やや強	いもち病に著しく弱いので適期防除に努める。
ヒノヒカリ	8/23	10/8	やや弱	やや弱	やや弱	刈り遅れると品質が低下するので、適期収穫に努める。

令和7年度版病害虫・雑草防除の手引き　https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/bojonotebiki.html

注）農薬は令和7年1月23日現在の登録状況に基づき、記載しています。